

「イ」と「ブレディケーション」の区別を立てた記念碑的な著作ではあるが、それ以前のプラトンに、その区別の意識があったのであろうか。こうした当然の疑問に対して、チャーニスは例によって文献学者らしい博学ぶりを見せてくれる。彼の指摘によると、ほかならぬ『パルメニデス』の第二部、すなわち論理的訓練と称するこの第二部に次のような議論がある (Parmenides 158A)。

もし幾つかの部分があって、そのおのおのが一なることを意味するとすれば、「一」(to hen)におおずかなければならない。しかしその部分が「一」にあずかるとは、それが一とは異なることを意味する。もし異なるのでなければ、その部分は一にあずかることもなく、それ自身一であることになるからである。これに対して「一それ自体」(auto to hen)のみが一でありうるのである。

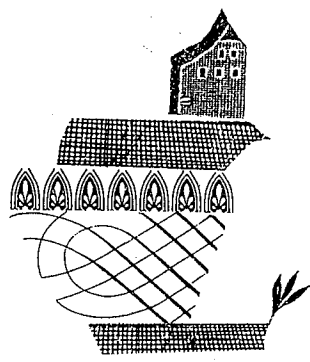
チャーニスによると、一のイデアは一と同一であり、部分はその一にあずかることによって一という性質をもつのであって、明らかにプラトンは「一」の二つの意味を区別しながら、こうした議論を展開していると思なければならぬことになる (G. 370-p. 371)。

こうしたチャーニスの反論からすれば、当然『パルメニデス』のイデア批判はオーエンの考えるようなイデア論にとつての不抜の論理でもないことになるし、またイデア批判に対してプラトンは直接の反批判をどこにも記していない事実を盾にして、ヴラストスのように、プラトンが焦りやいらだちを感じていたと見る必要もないことになる。プラトンとしては充分心得た上で誤ったイ

デア批判を老パルメニデスにさせたのであり、批判への正当な解答は、それぞれの読者の探索に委ねたのである。その答は対話篇の中にいわば隠されていると、プラトンは考えていたはずである。チャーニスは結論的にそう推定しているが、とにかく、文体、二元的対立、典型イデアの三つの論点から以上のように反論する彼からすれば、オーエンのように『デイマイオス』をわざわざ旧位置から移動させることもないし、イデア論的対話篇群と後期対話篇群とを分断して、分析哲学的に思考する哲学者をプラトンの最後の姿と見ることも無用の仕業なのである。

執筆者紹介

- 杉本秀太郎 (すぎもと・ひでたろう) フランス文学・思想。京都女子大学。著『大田垣運月』(淡交社)『洛中生活』(みすず書房)『文学の紋帖』(理想社)『文学演義』(筑摩書房) 訳書『フォニーオン』『形の生命』(岩波書店)『ドレーン』『音楽のために』(白水社) など。
- 斎藤 忍随 (さいとう・にんずい) 哲学。東京大学名誉教授。成城大学。著『プラトン』『知者たちの言葉』(ともに岩波新書) など。
- 神谷美恵子 (かみや・みえこ) 精神医学。著書『生きがいについて』(みすず書房)『人間をみつめて』(朝日新聞社)『このころの旅』(日本評論社) 訳書『マルクス・アウレリウス』『自省録』(岩波文庫) V. ウルフ『ある作家の日記』(シンポウ)『医学的心理学史』『フーコー』『臨床医学の誕生』『精神疾患と心理学』(みすず書房) など。
- 金関 義則 (かねせき・よしのり) 科学史、科学評論。著書『地獄につれられ』(みすず書房)『日本科学技術史大系16・土木技術』(第一法規出版) 訳書『クリス・アイディンフ』『百万人の原子学』(平凡社)、『ヴラストン』『原子力ハンドブック』(東洋経済新報社)、『クラウザー』『二〇世紀の科学者』(みすず書房) など。



古市公威の偉さ

大正八年二月二七日に、古市公威は男爵を授けられた。大正四年二月一日に山川健次郎、穂積陳重が財閥の三井高保、森村市左衛門、古河虎之助、大倉喜八郎などとともに男爵を授けられた場合と違って、だしぬけに古市だけが授爵されたのは奇異に感じられた。顕著な功労のあったものが病死した場合には、単独の授爵ということもあったが、当時六五歳だった古市は工学界の長老として活躍し、理化学研究所長、工学会長の重職をなっており、さらに翌年は學術研究會議の会長に当選したほどであった。それに山川や穂積の場合は、大正天皇即位の大典にことよせて、派手すぎな首相の大隈重信がもりあげた祝祭気分につつまれていた。

工学関係のものは、特に土木関係のものは、古市の多方面にわ

みすず書房  
第222号  
1978  
9A  
サイン本  
9A  
サイン本

金関 義則

たる功労が比類ないものであったから、男爵は当然であり子爵でもおかしくないと受けとった。しかしながら爵位というものは、抜群の功労さえあれば必ず授けられるというものではなく、幾つもの関門をうまくぐりぬけなければならぬ。当時の首相であった原敬は爵位をほしがって奔走するものを軽蔑しており、他の人々とともに授爵の対象になったときも固く辞退しぬいた。原は宮内大臣の波多野敬直に対し、来年(大正九年)早々に財閥の川崎芳太郎、安川敬一郎とともに古市が男爵になることに同意していたが、元老の山県は承知できず古市だけを早急に男爵にせよと迫ってきかなかった。このことを原敬は日記に書きのこしており、「山県例の通、自分の子分のみ私する事、今更の事に非れば」と毎度の横車に憤っている。山県と同じく元老の松方正義も

同郷の川崎芳太郎の授爵を強く求めたが、川崎だけを早急にせよとは迫りなかつた。翌年一月二三日に川崎も安川も男爵になつたが、辞退しようとする安川に対しては、君のように國家に功勞あるものを捨ておくことは首相として責任を問われるとして、事前に説得せねばならなかつた。

明治二八年に原敬が外務次官として日清戦争の功績申請にあずかつていたとき、伊藤博文の女婿の末松謙澄や、自分の伊東巳代治がなりふりかまわぬ奔走によって男爵となつたが、それほどの功勞もなく名声をほしがる俗物とは知らなかつたと嘆いている。古市は授爵に狂奔するような人物ではなかつたが、山県のなりふりかまわぬ強要を原は容認しなかつたのである。それにしても原は、古市に功勞がなかつたと非難してはいないし、山県の有能な幕僚として評価せざるをえなかつた。

山県としては、古市ほど有能でない幕僚が、次々に男爵、子爵になっており、よく働いた古市に報いず済ますことは心苦しかつたのである。日露戦争に勝つために、京城・釜山鐵道を速成しようとして、古市が朝鮮で陣頭指揮した功績は、大きく顕彰すべきであつた。さらに山県は内務大臣として、古市を土木局長に抜擢し、停滞していた土木行政を刷新したころを偲ばずにはいられなかつた。山県は閩族を形成して、軍隊、警察、司法を支配したといわれるが、古市公威が整備し指導した土木局が遂行した河川、港灣、道路などの国土開発を、山県は誇りたかつたのである。山

県の陸軍における後継者であつた児玉源太郎、桂太郎が次々に倒れ、大正八年一月三月に寺内正毅が病没するに及んで、多年の懸案を早急に片づけたい気持ちに駆られ、古市の授爵についても坐視しておれなくなつた（山県とともに長州藩閩の三尊と呼ばれた伊藤博文もハルビンで暗殺され、つづいて井上馨も藩閩打倒をめざす政党と戦い疲れて大正四年九月一日に他界してからは、しみじみと老残の悲愁を感じるようになっていた）。

明治一五年二月に参事院議長となり、一六年一二月に内務卿となり、一八年一二月に最初の内務大臣となつてからは、武官としてのみならず、文官の統領としても絶大な権勢を振るつてきた山県は、自己の没後とも国土開発の成果だけは長く残つて多くのものから讃えられるものと信じたかつた。明治三年の春に、かつて薩摩藩士の血と汗をそそいだ宝曆の治水によつても完成しなかつた木曾川、長良川、揖斐川の三川分離が内務省土木局の直轄工事で完成したとき、首相であつた山県は西郷従道（内務大臣）、古市公威（通信次官）とともに現地に出かけて、祝盃をあげずにはいらなかつた。幕府の強請によるとはいえ、巨額の出費によつて薩摩藩の財政を傾けたこと、大事な家臣を幾人も憤死させたことを、詫びて自刃した家老の平田頼負が神として祭られているのを、薩摩藩出身の元老である西郷といつしよに拜んだ山県は感慨無量であつた（三三年九月に伊藤博文が政友会を結成するや、政党内閣に強く反対しつづけてきた山県首相に辞表を提出し再び

国会に現われることなく、西郷も同時に辞任し三五年七月に五九歳で病没する）。このとき現場を案内して面目をほどこした木曾川改修の責任者は、畿内区土木監督署長の原田貞介であつた。山県が明治二一年から二二年にかけて、古市などヨーロッパ留学の経験者を従え、ヨーロッパを視察して多くの成果をあげたが、東京大学を中退してベルリン工科大学で土木工学を学んでいた原田から、古市は工学教育はいかにあるべきかを聴取したのであつた。古市も山県も素朴で誠実な原田の将来に大きい期待をかけたが、二五年に原田が土木局に入って段々に頭角をあらわし、やがまし屋の沖野忠雄から深く信頼されるに至るうとは、想いもよらなかつた。

原敬が大正七年九月二九日に、藩閩ぬきの政党内閣を初めて実現し、さすがの山県も時勢の推移には抗しがたいことを思いしらされた。それだけに八年の歳末に、強引な古市公威の授爵が成功したとき、山県の築いた閩族政治を次々にくつがえしていた原にも、古市、沖野によつて整備された土木局だけは意のままに解体し再編できなかつたことを確認し、山県は深い満足感をもつて自らを慰めたであらう。工部省、工部大学校を育てた工学界の長老である山尾庸三（長州藩）が病気がちになり、いつか山尾に代わつて古市が工学全体の大御所になつたことも、山県は声を高くして誇りたかつた。かつて工学界の長老として振舞つた榎本武揚（幕臣、子爵）や大島圭介（幕臣、男爵）のことを思うと、古市

の授爵は遅すぎても早すぎはしないと、原敬をなじりたかつたであらう。

国土開発の歴史を振りかえるとき、内務省土木局が果たした役割を無視することは許されない。土木局が発足したのは明治一〇年一月一日で、昭和一六年六月に廃止され、それに代わつて土木局が設置された。したがって土木局は六九年間つづいたといえよう。しかしながら内務省土木局の前身をさかのぼつてゆくと、内務省土木寮（明治七年一月九日発足）、大蔵省土木寮（四年一〇月八日）、工部省土木寮（四年八月一四日）、工部省土木司（四年七月二七日）、民部省土木司（二年六月四日）があるから、民部省土木司の発足から数えれば七七年の歴史があるといつてよからう。民部省時代が約二年、工部省時代が三か月ならず、大蔵省時代が二年四か月では、落ちついた仕事はできなかつたであらう。殖産興業の中心官庁であつた工部省で、土木司から土木寮に昇格したとはいえ、工学、勸工、鉦山、鐵道、土木、燈台、造船、電信、製鉄、製作の一〇寮のうち、一等寮は工学、勸工、鉦山、鐵道までで、以下は二等寮であつた。すなわち土木寮は鉦山寮、鐵道寮ほどには重要とされていなかった。そこで土木寮は工部省に長く存続せず、大蔵省の營繕寮に合併され、大蔵省土木寮の看板をかかげたのが明治四年一〇月であつた。

明治三年に、民部省土木司は任期を終えてオランダに帰国する

軍医パウダインに有能な土木技師の派遣を依頼し、パリに駐在していた弁務使の鮫島尚信からもオランダ政府に交渉させ、長工師ファンドールンが招かれることとなった。ファンドールンが来日したのは五年二月であったから、受けとめたのは民部省ではなくて、大蔵省(大蔵卿は大久保利通)であった。しかしオランダ技師が本格的な仕事を始めたのは内務省(内務卿は大久保利通)土木寮になってからであった。明治四年から六年にかけて大久保は大戸孝允、伊藤博文とともに岩倉具視を助けてヨーロッパ視察を敢行し、多くの収穫をもたらしたが、帰国ももなく六年一月二十九日に内務省を創設して自ら内務卿となった。大久保は警察行政に重点をおいたが、土木行政も決して軽視したわけではなかった。極めて多忙な晩年の大久保が、天竜川治水を訴えた金原明善、安積開拓を願った中条政恒などに耳を傾けて計画の実現をはかり、明治一年五月一日に暗殺されたあとも大久保の遺志は後継者によって遂行されたことは、看過してはならないであろう。

オランダ技師の指導によって、まず明治七年に淀川の低水工事が始まり、八年から一八年にかけて、利根川、信濃川、木曾川、北上川、富士川、庄川、阿賀川、最上川、阿武隈川、大井川、天竜川、吉野川、筑後川が着工された。いわゆる政府が直轄で施工する重要一四河川の土木工事と呼ばれるものである。明治一〇年から一七年にかけて、最初の土木局長となった石井省一郎(小倉藩)は、近代的な土木技術を身につけた人材を求めたが、なかなか

か思うようにならなかった。まず現われたのはアメリカ留学から帰国した宮之原誠蔵(薩摩藩)で、淀川、木曾川の現場にまわされた。明治一年になって東京大理学部土木学科から、また二年になって工部大学校土木学科から卒業生が出るようになった。卒業生の数は少なかったし、土木局を志すものが多くなかったとは、第1表からもうかがえるであろう。工部大学校は六年の課程が基礎二年、専門二年、実地二年と分かれており、ほとんどが官費生徒で最後の二年は工部省の定めた職場にまわされ、しかも卒業後も義務年限が七年間あって自由に職場が選べなかった。ただし卒業しても官庁にも民間にも工部省の指定する職場がない場合もあって、義務年限なるものも崩れていった。工部省は工部大学校卒業生の初任給を一等及第(卒業と同時に工学士となる)は三〇円、二等及第(卒業のち工学士となりうる)は二五円と規定していたが、建設ブームとなれば民間は規定を無視した高給で誘うようになる。

明治一年に東京大学から石黒五十二、仙石真、三田善太郎(黄進生、谷田部藩)が卒業したが土木局には入らない。二年には東京大学から大森俊次、橋協、二見鏡三郎(黄進生、松尾藩)、清水清、野尻武則が卒業して、清水(東京府平民)だけが土木局に入ってきた。工部大学校からは二年に初めて一等及第の南清石橋綱彦と三等修業(工学士にはなれない)の杉山頼吉が出てくるが、南は鉄道土木、石橋は燈台建設の勉強のためにグラスゴー

大学に留学を命ぜられ、杉山は長野県に配属され軽井沢の道路建設に当たった。一三年には東京大学から小柴保人、倉田吉嗣、岡胤信、日下部弁二郎、青木元五郎、腰塚英が卒業し、小柴、岡、日下部、腰塚の四人が土木局に入ってきた。工部大学校からは一等及第が小林八郎、二等及第が遠邑容吉、太田六郎、千種基、渋谷競多、寺内義真、飯塚義光、佐伯敦崇が出てくるが、小林は自費留学でグラスゴー大学に入り、飯塚、佐伯は卒業直後でなく三年後れて土木局に入ってくる。それにしても一三年一月にフランス留学の古市公威とともに岡、小柴、腰塚、日下部が土木局に入ったのは壯観である。早世した腰塚を除いた四人は、やがて土木局の柱石となったからである。一三年二月二十八日に勸農局長から内務卿となった松方正義の積極的な意図なしに、これら五人の入局はありえなかった。高給をとるオランダ技師に代わって立派に役立つことを、松方は確信していたようである。しかしながら松方は大隈重信、佐野常民のあとをついで一四年一〇月二二日に、大蔵卿となり参議もかねることになって内務省を去った。

代わって内務卿となった山田顕義(長州藩)は、大久保、松方の積極的方針を踏襲した。一五年にはハノーバー工科大学を卒業して帰国した田辺義三郎(長州藩)と東京大学を卒業した長崎桂の二人が土木局に入ってきたにすぎないが、一六年には東京大学卒業の近藤仙太郎のほか工部大学校出身がどっと入り、直轄工事が進んでいる現場に配置された。さらに東京大学を一一年に卒

業して神奈川県土木課に入り、二年から一六年にかけイギリスで土木の実地研修をしてきた石黒五十二が内務省衛生局兼勤で土木局に入ってきただけでなく、農商務省で猪苗代疎水に当たっていた山田寅吉が土木局に移ってきたのであった。沖野忠雄も古市にさわられて文部省から土木局に移ってきた。ところがまもなくの一六年一月二二日に、伊藤博文が憲法調査のヨーロッパ出張して参事院議長に復帰し、議長山田が内務卿となり、山田は司法卿として法典整備に当たることとなった。すなわち山田は獲得した人材を、十分に駆使するまで内務省に留まらなかった。十分に駆使する役割を、やがて山田は山田以上に果敢に果たすことになる。それは二三年一月に山田が内閣を組織し二四年五月一九日に内務大臣を西郷従道に譲るまで、内務卿、内務大臣あわせて一〇年に近い任期を通して閥族形成に心くだいたからである。そのような状況のもとで、どのように土木局は整備されていったか。まず土木局にとっての著しい期日は、明治一八年一月二二日に、太政官制から内閣制度に移ったことである。このとき内務卿から、内務大臣となった山田は地方自治制度の制定と取りくむこととなったが、土木行政を推進するため一八年七月に、次のように全国を六区に分けて土木監督署を設置した。

第一区 武蔵、上総、下総、常陸、上野、下野、安房、相模、伊豆、駿河、甲斐、遠江、信濃の一部(関宿、二三年九月から東京へ移る)

土木監督署の発足と整備

明治19年	明治24年
第一区 (東京)	第一区 (東京)
(2) 山田 寅吉	(2) 石黒五十二 : M31転出 (海軍技監)
(5) 小林 八郎 M13工部大	(4) 青木元五郎 M13東京大 : M29広島署長, M40名古屋所長, M44仙台所長, T2大阪所長, T6退官
(6) 飯塚 義光 M13工部大	(5) 近藤仙太郎 M16東京大 : M39東京所長, T2退官
(5) 近藤仙太郎 M16東京大	(6) 大窪 正 M23工科大
	試 市瀬恭次郎 M23工科大 : T2仙台所長, T6調査課長,
	試 高橋達次郎 M24工科大 T8神戸所長, T13技監, S3
	第二区 (仙台) [病没]
第二区 (仙台)	第二区 (仙台)
(2) 山田 寅吉	(4) 小林 八郎 M13工部大 : M38退官
(5) 小柴 保人 M13東京大	(5) 近藤虎五郎 M20工科大 : M28製図課長, T11病没
(6) 宮城島庄吉 M16工部大	試 青山鼎之助 M23工科大
第三区 (新潟)	第三区 (新潟)
(3) 沖野 忠雄	(4) 小柴 保人 M13東京大 : T38新潟所長, M44調査課長,
(5) 岡 胤信 M13東京大	(5) 黒田豊太郎 M19工科大 [T2退官]
(6) 上山 基 M16工部大	試 石田 石代 M23工科大
第四区 (大阪)	第四区 (大阪) [7退官]
(3) 宮之原誠蔵	(2) 沖野 忠雄 : M38大阪所長, M44技監, T
(5) 清水 済 M 東京大	(5) 佐伯 敦崇 M13工部大M27名古屋署長, M29病没
(6) 香取 多喜 M14工部大	(5) 西尾虎太郎 M22工科大 : M36転出 (大阪市技師・築港)
(5) 佐伯 敦崇 M13工部大	(6) 丹羽 鋤彦 M22工科大 : M32転出 (大蔵省技師・港湾)
	試 三宅 次郎 M23工科大
	試 奥山岩太郎 M23工科大
	試 三池貞一郎 M23工科大 : T6仙台所長, T13退官
	試 鶴田 多門 M23工科大
	試 井川喜久蔵 M24工科大
第五区 (徳島)	第五区 (広島)
(3) 田辺義三郎	(4) 日下部弁二郎M13東京大 : M38東京所長, M39退官
(5) 腰塚 英 M13東京大	試 関谷 鈴吉 M24工科大
(3) 日下部弁二郎M13東京大	
第六区 (久留米)	第六区 (久留米)
(3) 石黒五十二	(4) 岡 胤信 M13東京大 : 転出 (大阪市技師・築港)
(5) 長崎 桂 M15東京大	(5) 長崎 桂 M15東京大
	(6) 渡辺 六郎 M22工科大 : M44新潟所長, T13退官
	試 長尾 半平 M24工科大
	製図課
	(3) 清水 済 M12東京大 : M26病没
	熊本県 中原貞三郎 M15東京大 : M31福岡署長, M44大阪所長,
	[T2東京所長, T6退官]
	新潟県 岡崎 芳樹 M22工科大 : 44名古屋所長, T2調査課長,
	[T6大阪所長, T6退官]
	原田 貞介 ベルリン工大 : M31名古屋所長, M40調査課長, M44
	[下関所長, T2技監T13退官]

土木技師の増強 (土木局の発足M10から土木監督署の設置M19へ)

	M-10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
* 古市 公威 F				120	120	170	200	200(3.2)	200(3.2)	200(2)
* 山田 寅吉 F							200	200(3.2)	200(3.2)	200(2)
宮之原誠蔵 A	80	80	80	80	80	130	130	150(4.2)	150(4.2)	150(3)
* 沖野 忠雄 F							120	150(4.2)	150(4.2)	150(3)
* 石黒五十二 M11東京大, E							120	125(4.3)	125(3.2)	150(3)
田辺義三郎 D						80	80	125(4.3)	125(4.3)	150(3)
小林 八郎 M13工部大, E								50 補	50 補	50(5)
* 清水 済 M12東京大			40	40	40	45	45	50 補	50 補	50(5)
* 岡 胤信 M13東京大			30	30	30	35	45	40 補	45 補	45(5)
* 小柴 保人 M13東京大				30	30	30	35	40 補	45 補	45(5)
腰塚 英 M13東京大				30	30	30	35	40 補	40 補	45(5)
* 日下部弁二郎M13東京大				30	30	30	35	40 補	40 補	45(5)
長崎 桂 M15東京大						30	35	40 補	40 補	40(6)
佐伯 敦崇 M13工部大								30	35 補	40 補
飯塚 義光 M13工部大									30	35 補
香取 多喜 M14工部大										30
江森 盛孝 M14工部大										30
高田雪太郎 M14工部大										30
伊藤隆三郎 M15工部大										30
* 近藤仙太郎 M16東京大										30
宮城島庄吉 M16工部大										30
* 山口準之助 M16工部大										30
上山 基 M16工部大										30

第1表 (上方) 明治10年に内務省土木寮は土木局と改称され、近代的な土木技術を修得したものが入ってくるようになった。明治17年に初めて技師、技師補という名称が登場する。(3・2)は三等二級技師、(2)は二等技師、(補)は技師補を示す。数字は月俸を円単位で表わした。東京大学理学部土木工学科、工部大学校土木科卒業を、それぞれ東京大、工部大と略記し、卒業年次を書きそえた。フランス、ドイツ、イギリス、アメリカに留学したことは、それぞれF, D, E, Aで表わし、学位令による工学博士を後日、獲得したものには\*を付けておいた。

明治19年には、全国が6地区に分けられ、土木監督署がおかれ、巡視長(一等ないし三等技師)、巡視(三等ないし六等技師)、巡視補(技手、属)が配置された。どのように配置されたかは、第2表の左方を見て頂きたい。19年ころから土木建設のブームが起り、土木局から民間企業に移るものが出た。

第2表 (左方) 土木監督署の官制は、古市公威の構想を内務大臣の山県有朋が受けとめて実現した。山県は明治23年に古市を抜擢して土木局長とし、古市は着々と土木局を整備していった。古市は19年から工科大学教授兼工科大学長となって、土木工学科で河海工学の講義を担当した。古市の教えた卒業生が土木局に入ってくるようになり、ここに見えるように24年には多数の技師試補として土木監督署に配置された。

これらの人々のうち、長く土木局で働き、要職を占めたものについて、その後の職歴を略記しておいたが、第3表と対照して頂きたい。ただし近藤虎五郎だけは、製図課長のほか直轄工事課、治水課、監理課、技術課の課長や土木技監事務取扱を歴任したが、紙面の都合で省略したから、第3表で補なって頂きたい。土木監督署長、土木出張所長はそれぞれ署長、所長と略記した。

第二区 磐城、岩代の一部、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後（一ノ関、二二年七月から仙台に移る）  
 第三区 越後、岩代の一部、越中、佐渡、能登、加賀、越前、飛騨の一部、信濃の一部（西鳥屋野新田、二七年七月から新潟に移る）

第四区 三河、尾張、美濃、信濃の一部、飛騨の一部、伊勢、志摩、伊賀、近江、若狭、山城、大和、摂津、河内、和泉、紀伊、丹波、丹後、播磨、但馬（大阪）

第五区 淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐、備前、備中、備後、安芸、周防、長門、美作、因幡、伯耆、出雲、隠岐、石見（徳島、二二年七月から広島に移る）

第六区 豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後、薩摩、大隅、日向、杵波、対馬（徳島）

土木監督署はその地域にある政府の直轄工事を実施し、府県の土木事業を監督するもので、巡視長（一等ないし三等技師）、巡視（四等ないし六等技師）、巡視補（技手、属）が配置された。二三年八月四日から巡視長は署長と呼ばれるように改められた。一九年七月に発足したときと、二四年八月に充実したときの陣容を、表2にまとめて対比してみた。この五年間に、巡視長の山田寅吉、宮之原誠蔵、田辺義三郎が消え、新しく署長に小林八郎、小柴保人、岡胤信、日下部弁二郎が加わり、面目が一新された。明治二七年七月三日には次のように区域変更が行なわれ、新し

い第四区の署長に佐伯敦崇がなった。  
 第一区 東京府、神奈川県、埼玉県、群馬県、千葉県、茨城県、栃木県、山梨県（東京）  
 第二区 宮城県、福島県、岩手県、青森県、山形県、秋田県（仙台）

第三区 新潟県、長野県、石川県、富山県（新潟）  
 第四区 三重県、愛知県、静岡県、岐阜県、福井県（名古屋）  
 第五区 京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、滋賀県、和歌山県、徳島県、高知県（大阪）

第六区 鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、香川県、愛媛県（広島）

第七区 長崎県、福岡県、大分県、佐賀県、熊本県、宮崎県、鹿児島県（久留米、二七年一〇月から熊本に、三一年四月から福岡に移る）

七区の体制は三八年三月三十一日までつづくが、これらは全て古市公威の献策を山県有朋が受けとめて実現したもので、土木局は限られた予算ではあったが整然と作業を進めることができた。

古市公威を土木局へ迎えたのは内務卿の松方正義であり、土木局で古市を思うがままに活躍させたのは、内務大臣になってからの山県有朋であった。古市は土木局に入ったものの、古市ならではの仕事が待っていたわけではなかった。浜尾新、菊池大麓にすめられて東京大学理学部講師となって、数学・物理学・星学科の

学生（田中正平、藤沢利喜太郎、田中館愛橋）に数学の講義をするという余裕があった。田中館は老年になってからも、深い感銘を受けたといっていた。しかしながら東京大学の講師は一年だけで止めた。一五年四月、五月に起こった北海道の豊平川の水害を、山田顕義に随行して視察し、豊平川の改修計画を担当することになったからである。現地に岡胤信をやって工事を監督させ、一七年九月に完工し、札幌市民を喜ばせた。古市の能力を高く評価した山田は、つづいて信濃川下流の改修にさしむけた。古市は一七年一月に三〇歳で川名幸子（千葉県平民）と結婚し、本郷弥生町に新居を営んだばかりであったが、一二月から新潟県の現地に勤務することになった。夫人は一四年七月に東京女子師範学校（東京女子高等師範学校の前身）の小学師範科を猪之子簞子（沖野忠雄夫人）、多賀春子（鳩山和夫夫人）とともに卒業した当代の才女であっただけに、信濃川出張所があった古志郡草生津（のち中蒲原郡西鳥屋野新田に移った）での生活は大変だったであろう。しかしながら信濃川の治水と取りくんだことは、古市にとってフランス留学に劣らず有意義であった。信濃川改修について、外人技師エッセルの計画、モデルの意見を、点検し批判することになったからである。

一六年一二月から内務卿となった山県は、かつて戊申の戦争では信濃川下流で長岡藩兵と闘かって苦しんだことを想いつつ、古市の現地作業に大きい期待をかけた。新潟平野の氾濫を解決して、

新潟県民を喜ばせたいと、かつては長州藩の前原一誠も考え、山県もまた強く望んでいた。古市は現地での経験を踏まえ、またフランスの制度も考えあわせて、土木監督署構想を、山県に提出した。それが実現する前に、古市は帝国大学総長の渡辺洪基と理科大学長（兼工科大学長心得）の菊池大麓から、工科大学長に就任することを求められた。古市はすでに着手している作業を、フランス留学以来の親友である沖野忠雄にゆだねて帝国大学に転ずることとなった。工科大学長として古市以外に適任がなかったといえ、山県は古市を手ばなすに忍びず、兼任の形で土木局勤務を命じた。これまでよりも熱心に、古市の献策に耳を傾けるようになった。東京大学工学部に工科大学校を合併して工科大学を築き足させることは、古市以外のものには甚だ困難であったろう。深慮遠望の円満居士ならではの流儀で、古市は世界有数の工科大学を層々としてつくりあげていった。工部大学校で土木科を教えたアレキサンダーに工科大学にとどまるよう菊池がすすめたが、工部大学校の廃止を遺憾とするアレキサンダーは怒って帰国し、アレキサンダーを慕う生徒は騒然となり、菊池は古市に泣きつくほかはなかった。

すでに陸軍の兵制はドイツを、海軍はイギリスをまねるようになっていたが、古市は海軍次官の伊藤篤吉（舞鶴藩）に提言してフランスの造船総監のエミール・ベルタンを海軍大臣顧問として招き、工学教育について多くのことを学んだ。ベルタンは一九年

から二三年にかけ四年間もとどまらず、造船技術で桜井省三、松尾鶴太郎などの優秀な門下を育てて帰国した。どのように日清、日露戦争で日本海軍を支えたか、その功績によって旭日大綬章が贈られたほどである。このように将来を読みとった古市の活躍を見逃がさなかつた山県は、二二年から二三年にかけてのヨーロッパ出張に、古市を随行させずにおれなかつた。古市は久々にヨーロッパを歩いて、いよいよ視野を駆け見識を高めることができた。そうして二三年六月に、山県は古市を抜擢して土木局長とし、工科大学長を兼任とさせた。さらに同年九月に最初の勅選議員として、帝国大学から加藤弘之(総長)、外山正一(文科大学長)、菊池大麓(理科大学長)、穂積陳重(法科大学長)とともに古市は貴族院に送りこまれた。これは山県による人事とはいえないが、貴族院に勢力を駆けようとする山県にとって有難かつた。第2表に示した明治二四年の土木監督署における技師の配置は、もはや古市の思うがままに土木局を動かせる姿を如実に示すものである。人事の移動で著しいことは、土木局に入ってきた工部大学校卒業生のほとんどが姿を消していることである。例外は二二年に卒業した小林八郎と、二三年に卒業した佐伯敦崇だけである。ともに土木監督署長になって、小林は北上川で、佐伯は木曾川で改修工事を指導したにもかかわらず語られることなく、退官後の消息は不明である。小林はイギリス留学の費用を出した金原明善のため、三八年から財団法人、金原疏水財団の理事となり、天竜川分

水事業に参加したこと以外は判らない。小林や佐伯と同時代の東京大学出身者が次々に工学博士になっているのに、小林も佐伯もなっていない。当時の学位はほとんどが研究論文によらず、賞禄のあるものが推薦されてなるのが慣例であった。工部大学校は同時代の東京大学理學部の工学関係に比べて、より多くの工学博士を輩出させたといわれる。東京大学の土木工学科は明治一一年から一八年にかけて三〇名を卒業させ、そのうちの一四名が博士となったが、土木局に入った石黒五十二、清水清、岡胤信、小柴保人、日下部弁二郎、青木元五郎、中原貞三郎、近藤仙太郎は落ちこぼれなく学位を得て半数を占めた。鉄道土木が河川土木よりも盛んだつたにもかかわらず、鉄道関係は仙石貢、野村竜太郎、原竜太、白石直治、大屋権平の五名であった。工部大学校の土木科は明治一二年から一八年にかけて四〇名を卒業させ、その三分の一の一三名が博士になった。すなわち第一期は二名が全員(南清石橋綱彦)、第二期は八名でゼロ、第三期は七名でゼロ、第四期が七名のうち三名(野辺地久記、笠井愛次郎、植木平之允)、第五期は一名のうち四名(渡辺嘉一、田辺朝郎、小田川全之、山口準之助)、第六期の四名のうち三名(久米民之助、吉本亀三郎、古川阪次郎)、第七期は五名のうち一名(吉村長策)が博士になった。小林、佐伯を含む第二期と、つづく第三期の卒業生はほとんどが土木局の河川工事に参加していて、工学博士が皆無というのはうなづけない。特に第二期を首席で卒業し、グラスゴウ大

学に学んだ長州藩出身の小林は、北上川の改修に長く取りくんだだけに奇異に感じられる。明治三八年に仙台の土木監督署が廃止され、業務は東京土木出張所に引きつがれたためか、そのとき仙台を去つた小林について消息が絶えてしまうのである。

また明治六年に一四歳でドイツに渡り、二二歳でハノーバー工科大学を卒業した田辺義三郎(長州藩)が、三〇歳の若さで病没したことは、山県だけでなく古市や沖野をも嘆かせた。古市も沖野もフランスに留学したにもかかわらず、ドイツの工学教育を高く評価していたからであった。田辺の跡を追うように、ベルリンで土木工学を学んでいた原田貞介も残念がった。田辺は体力に恵まれず、意欲的な仕事の途中で借しくも倒れ、それは数年後に原田によって引きつがれることとなった。田辺の死を最も悲しんだのは、ベルリン駐在武官の原田一道(岡山藩)の長男、豊吉(弟の直次郎もドイツに学んで画家となり、森鷗外と親交があった)であった。原田豊吉は明治六年にドイツに一二歳で留学し地質学で業績をあげ、帰国して理科大学の教授となったが、原田もまた若くして三四歳で病没した。古市と肩を並べて活躍するであろうと思われた宮之原誠蔵と山田寅吉が、土木監督署が廃止してまもなく退官したことも注目をひく。宮之原が淀川、木曾川で長く仕事をしたが、今日では事績のほとんどが判らなくなっている。淀川、木曾川については、利根川、信濃川、北上川など東日本の河川に比べて資料が遙かに豊富だといわれるが、宮之原関係の事績

を示唆するものが見つかからない。明治一〇年から二〇年にかけてのことで、この時代が判らないのはもどかしい。特に一八年には淀川、木曾川の治水にとって最も重要な水害が発生しており、このときに宮之原がどう働いたか、記録されていないのは残念である。山田寅吉も第四区の宮之原と並んで、第一区、第二区の土木監督署の最初の署長という要職を占めたが、ほとんど忘れられてしまつて語られることがない。早く土木局から退いたからといえはそれまでである。しかしながら実際に署長の職務を執行したかさえ、甚だ疑わしいのである。山田の略伝を書くとき参考になる資料として、昭和五年に発展社出版部から刊行された『大日本博士録・第五卷』がある。

そこに記載された全文を紹介しよう。これは山田が自ら晩年にしたためた文章に基くと考えられるからである。山田の手記と認められるものが皆無に近いので貴重である。

山田寅吉 正六位、インヅニエール・デ・アーツ・エ・マヌ  
ファクチュール(仏国エコール・サントラル)、豊国炭礦株式  
会社社長

(出生) 嘉永六年癸丑十二月二十一日生、福岡藩士、山田忠吾  
の長男也

(学歴及閱歴) 明治元年頃、藩の官費生に選ばれ、十五歳の時  
艱難辛苦して英国に渡り、それより仏国に渡り中学を経て、明  
治九年エコール・サントラル大学土木建築科卒業、前記インヅ

ニエールの学位を受く。十年土木及機械研究に従事、十一年日本政府備（月俸二百円）被仰付。専ら製糖業、紡績業、農具其他製造業調査被命。十二年猪苗代疏水工事設計主任被命。同年北海道紋別製糖所建設主任被命。十四年農商務省御用係（月俸二百円）被仰付。十五年之を辞し、東京馬車鉄道会社技師長として就任し、同社新橋、上野、浅草間軌道敷設及事業開始に従事す。十六年任内務技師。十七年第二土木監督署長被命。十八年第一土木監督署長兼任被命。十九年依願内務省技師を辞す。同年四月より二十二年四月に至る間、日本土木株式会社取締役兼技師長として会社事業の内、専ら九州鉄道全部設計、門司築港全部設計、大津疏水工事請負、參州牟呂新田工事請負、讚岐鉄道設計及請負、木曾川浚渫工事請負、熊本城震災復旧工事請負等の事業に従事す。二十二年より三十年に至る間、個人として専ら福岡県水害復旧工事設計及請負、大分県国道開設工事請負、岡山県水害復旧工事、伊予鉄道延長工事設計及請負、兩予鉄道新設工事設計及請負、住友鉱山鉄道新設々計及請負、佐野鉄道新設々計及請負、上野鉄道新設々計及請負等の事業に従事す。三十年より三十二年に至る間、金辺鉄道会社技師長として会社の工事に従事す。三十二年三月工學博士の学位を受く。三十六年より三十九年に至る間、個人として専ら朝鮮京釜鐵道の内一部及京義線鐵道工事の内一部請負事業に従事す。四十年より四十二年に至る間宇ノ島鐵道株式会社技師長として会社の工

末女清子は福岡県人見万次郎に嫁せり。二男鉄彦は印度旅行中客死せり。

（遺族現住所）北海道室蘭市緑町五十三番地

（本籍地）福岡県京都郡豊年村五百七十六番地

『大日本博士録』編集部は早くから原稿を集めていたから、山田が療養時代にしたためたものに加筆したと考えられる。重大な誤記があるので注意したい。それは明治一七年に第二區監督署の署長になり、一八年に第一區監督署の署長をかねたという部分である。土木監督署が設置されたのは明治一七年七月二日であり、それ以前に土木監督署なるものは存在しない。それから当初は署長とはいわず巡視長とよんだ（巡視長が署長と呼ばれるようになるのは二七年からである）。しかも監督署も当初は第一區は関宿にあり、第二區は一の関にあって、それぞれ東京、仙台に移るのは山田が土木局を去った後のことである。山田は一六年に土木局に入ったが、一九年に土木局を去り、一九年四月から二二年四月まで日本土木株式会社の技師長として働いたとしたためていることが事実なら、土木局が山田を慰留しようとして辞任をなかなか認めなかったからではないか。一六年ころから北上川の現場を監督し、やがて上京し利根川を兼務するようになったが、日本土木株式会社の業務に深入りして土木局の業務を捨てるようになったのではないか。第二區、第一區の巡視長を命ぜられたと公式記録に残っているが、実際に第一區の現場では正藤仙太郎が巡視長代

事に従事す。大正二年より八年に至る間、個人として朝鮮江原道春川郡新北面牛頭里灌溉工事設計及請負、京畿道臨津面水利組合設計等の事業に従事す。九年豊園炭礦株式会社社長に任命。十年同社を辞す。同年朝鮮臨津面水利組合長を被命。十三年十二月同組合長を辞す。昭和二年三月三十一日病の爲め大分県別府に療養中逝去す。

（専門）土木建築

（学位）工學博士、授与日附・明治三十二年三月二十七日、工學博士會推薦。

（業績）博士の業績中特筆すべきは、日露戦争当時速成を要すべき京釜鐵道及京義線の一部工事なり。京釜鐵道は当時古市公威博士が總裁たり。京義線は京城と新義州間の鐵道にして、今日は南滿州鐵道株式会社の管轄に属するものなるが、日露戦争當時は軍用鐵道と称し、山根陸軍工兵少將統監の下に博士は當時今の漁被駅を中心とせる工區を請負、予期の如く竣工せしめ軍隊の輸送上聊かも遺憾なからしめたり。其他閱歴参照。

（趣味嗜好）事業

（遺族）相続人、長男山田伝之助（明治十四年十二月二十八日生）、同妻八重（明治三十九年九月十五日生、宮城県土族故伊藤嘉市四女）との間に長女光子（大正十五年生）あり。猶長女糸子は当時川崎造船所技師（仏國造船學校卒業）、松岡右左松に嫁せるも不幸兩人共病死せり。三女友子は醫學博士山脇虎雄に

理として動き、第二區では小柴保人が巡視長を代行せねばならなかった。

古市公威が内務大臣の山県有朋に命ぜられて土木監督署構想をまとめたが、そのころは鐵道をはじめとして建設チームで、官庁の技師が高給につられて民間に流出しがちであった。土木局の担当する河川改修も、低水工事中心から高水工事中心に切りかえようという要望が強まりつつあったが、土木局に与えられた予算はまだ微小なものであった。したがって才氣煥発で仕事ざかりの山田寅吉にとって、土木局の職務は満足しようもなかった。富国強兵、殖産興業が叫ばれ、官庁の技師が民間企業を指導する機会が多かったから、山田の脱線は山県にも古市にも引きとめられなかったであろう。

出生の順序では山田寅吉（嘉永六年二月二日）、沖野忠雄（翌年の安政一年一月二日）、古市公威（安政一年七月二日）、石黒五十二（安政二年六月一〇日）となるが年令は大差なく、土木監督署の発足したときは三二歳前後であった。勅任技師の定員は明治一九年には二名で、これが四名にふえるのは三三年のことである。まず古市、山田が勅任技師となり、二二年に山田が民間に去り、ついで三三年に古市が土木局長になったあと、沖野、石黒が勅任技師となった。三一年に石黒が海軍に転じたあと、沖野のほかは小林八郎、小柴保人、日下部弁二郎が勅任技師となる。土木局の要職を占めた技師を第3表に示しておいたが、大正末期



には勅任技師の定員が二名に増える。すなわち内務技監、東京横濱、仙台、新潟、名古屋、大阪、神戸、下関の土木出張所長、第一技術課長、第二技術課長、土木試験所長である。内務技監は土木局内部の技師の首座であるが、古市が占めた土木技監は内務大臣または内務次官に直屬して、土木局長の部下とはいえなかった。古市は土木局長のときも、土木技監のときも、土木局の勅任技師の定員の外にあった。土木局長は原則として法科系官僚の職席であった。内務技監となった沖野忠雄、原田貞介、市瀬恭次郎が高等官一等の勅任技師であったが、しばしば高等官二等の土木局長の部下として働かねばならなかった。

古市公威は土木局長に抜擢され手腕が発揮できるようになるとともに、工科大学教授、学長の仕事を軽減せねばならなくなった。明治一二年に東京大学を卒業し、直ちに土木局に入り長く木曾川の改修に当たってきた土木監督署四等技師の清水清をくどいて、二四年二月二三日に工科大学教授に迎え、河海工学の講義をゆだねた。清水は木曾川の現場を離れたがらなかつたようである。さらに古市は清水を、最初の製図課長に任命した。土木局には計算課、治水課、道路課があったが、いずれも課長は事務系が占めた。二四年八月一七日に製図課と直轄工事課を新設したが、製図課長は技術系が占める唯一の課長であった。ところが清水が二六年七月一九日に病没し、清水に多くの期待をかけていた古市の落胆は大きかった。工科大学の講義は、二三年一月二〇日に助教授にな

っていた中山秀三郎(帝国大学二年卒業)が引きつぐことになった。二六年九月一日に講義制が実施されたとき、土木工学第一講義(河海工学)は小川梅三郎(帝国大学一九年卒業)と中山秀三郎が分担することになった。

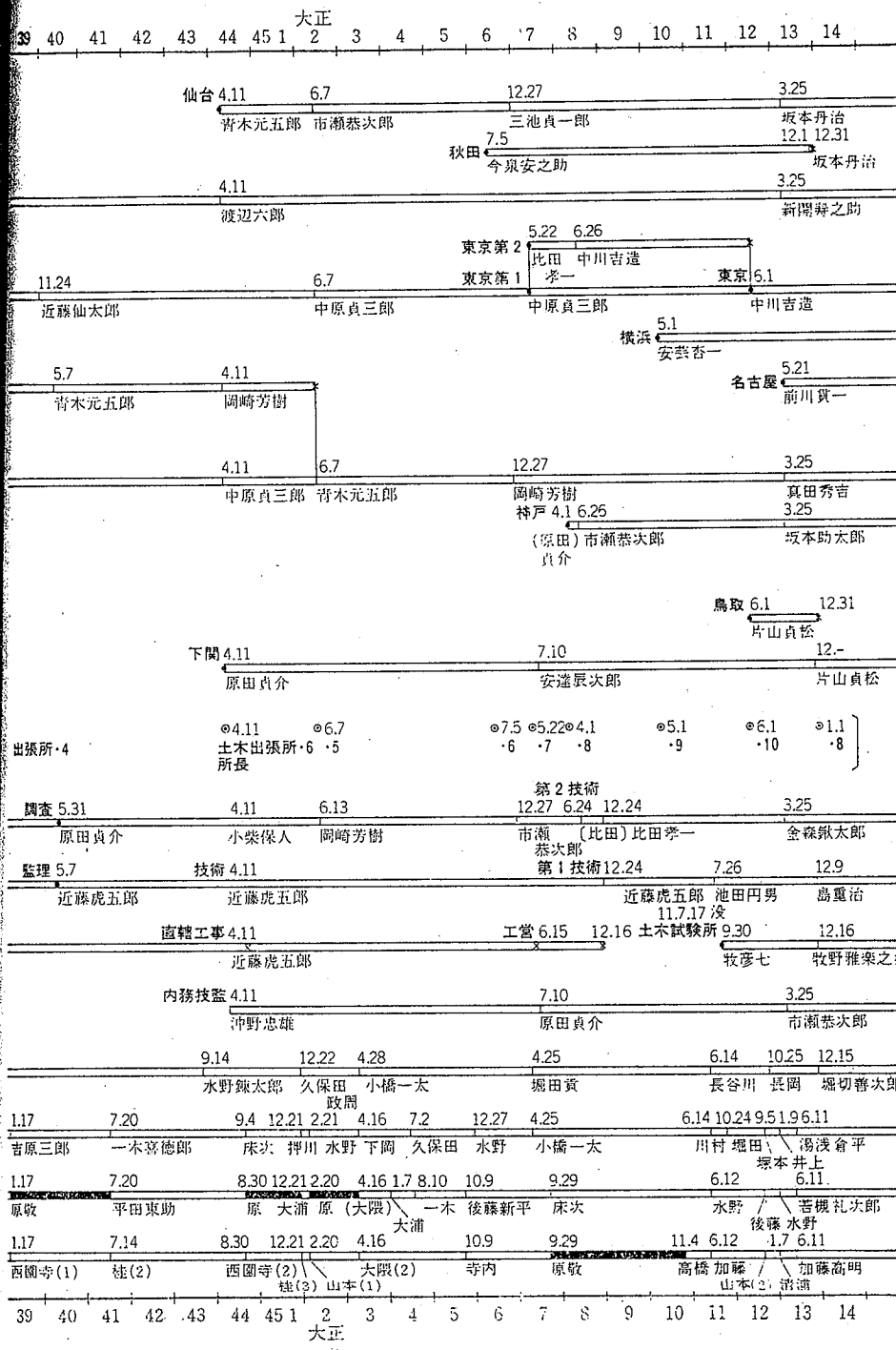
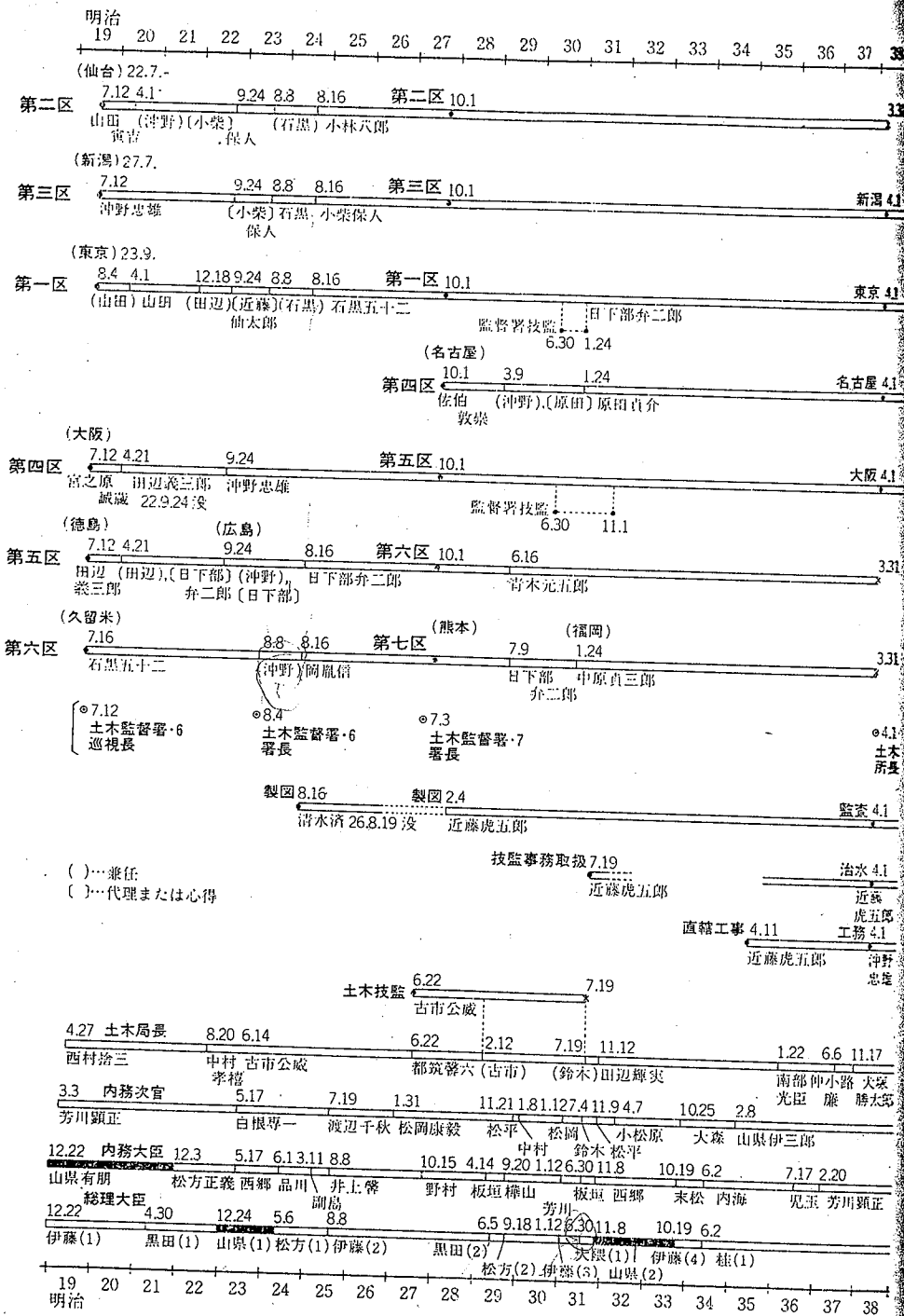
しかしながら土木局の製図課長はただちに適材が見つからず、北上川と取りくんでいた近藤虎五郎(帝国大学二〇年卒業)が任命されたのは二八年二月四日であった。近藤は早くから秀才と知られ、大学生時代は特待生となった。東京大学予備門では長岡半太郎、野村九郎、白井光太郎、渡辺芳太郎などと同級(一年下級に原田貞介や後に枢密院顧問となった岡田良平、一木喜徳郎、平沼騏一郎、内田康哉、林権助がいた)。厳しい試験を競って明治一五年に卒業したが、同じく新潟県出身の野村にはかなわなかつたらしい。野村は長岡とともに理科大学物理学科に進んだが、一八年六月七日に肺病で他界した。近藤は長岡半太郎、植村俊平(法科志願)と三人で、「野村九郎君の遺稿」を編集している。真田秀吉「内務省直轄土木工事史・沖野忠雄伝」(昭和三四年二月)では、近藤は明治二〇年七月に卒業して直ちに土木局に入ったとしているが、実際はアメリカに私費留学し、二三年六月に帰国して播丹鉄道株式会社の創立に参加している。同社を去って土木局に入って、内務技師試験になったのは二三年一月のこと、同年六月には土木監督署五等技師になっている。近藤は製図課長になる前に、加藤弘之(帝国大学総長)の三女、幸子と結婚しており、

やがて古市公威、沖野忠雄の跡をついで指導者となることが期待されていた。

明治三一年六月二日に自由党と改進黨とが合同して憲政党が結成され、これを基盤に大隈重信が内閣を組織し、大臣、次官、秘書官、参事官、局長、知事などの要職を憲政党員が奪いあうように占めた(賈進生出身でアメリカ留学した鳩山和夫も、このとき憲政党員として外務次官になった)。山県有朋を中心に集まった官僚は一斉に退却したが、古市も板垣退助(内務大臣)の慰留を拒んで土木技監兼土木局長を辞任したので、とりあえずの処置として近藤虎五郎が土木技監事務取扱を命ぜられた。古市に代わって土木技監に第五区土木監督署(大阪)署長の沖野忠雄が任せられて上京することが期待されたが、内務次官の鈴木充美(憲政党員)が土木局長を兼任して、土木技監は廃官となった。かつて古市公威は内務大臣、内務次官から一任されて思うままに動いたが、もはや法科系の土木局長に抑えこまれ、しかも内閣の代わる度に違った政党に支配されることになった。しかしながら政党出身の土木局長が、技師、技手の集団を党利、党略で動かすことはできなかった。誰が内務大臣、内務次官、土木局長になろうと、沖野の存在を無視することができなかったからである。

沖野は明治二二年九月から淀川治水に取りくんできたが、さらに三〇年七月から大阪築港にも打ちこまねばならなくなっていた。築港事業の許可と国庫補助の申請が国会で認められ、大阪市が工





もできなかった。それはなぜかを説明するよりも、大阪築港の起工式がどんなに盛大であったかを紹介するほうが判りやすい。まづ前日に西村捨三は衣冠束帯で堂々と行列を従えて住吉、生国魂、高津、豊国などの神社を巡拝し、神明の加護と築港の完成を祈願した。当日は豪華に盛りあげた祝賀気分（かねて花街、遊廓も鳴物いりで繰りだすことになっていたが英照皇太后の大喪で自粛された）のなかで、鉄入の儀式として、参謀総長の小松宮彰仁親王（陸軍大将）がおごそかに基石を防波堤頭に沈めた。それに先だつて小松宮は令旨を読みあげた。すなわち、

国の軍備は独り兵員の夥多、軍器の充実のみを以て満足すべきにあらず。其運用を徹活にするの機關、之と相待て発達するに非ざれば其威力を発揚するに足らざるなり。曩に大阪築港の議起るや、用兵上一日も緩ふす可からざる事業と認め、幕僚に命じ、其計画に参与せしめたり。今や其規画整頓し、茲に起工式を挙ぐるに会す。然れども業は起すに易く、成るに難し。諸子夫れ奮勵従事し、以て有終の美を濟さんことを努めよ。

内務大臣の樺山資紀（海軍大臣）、通信大臣の野村靖、土木局長の古市公威などとともに、対露作戦に心くたく参謀次長の川上操六（陸軍大将）、第四師団長の小川又次（陸軍中将）がうやうやしく並んでいた。大阪築港は市民の生活、生産のためだけでなく、対露、対露の戦備でもあったのである。かつて西村局長のもので沖野とともに働いた古市は、局長として大阪築港事業を推進

第3表 古市公威、沖野忠雄を中心にして、内務省土木局長のようにならなかつた。明治十九年に土木監督署が設けられてから大正末期までの幹部職員（署長、所長、課長など）の編成、異動をたどつてみた。内閣の更迭や内務大臣、内務次官の交代に比べて、土木局長の幹部職員が同じ部署に長く留まり、落ちついて仕事と取りくめたことが判る。国土開発の重責を負つた古市、沖野の深慮、遠謀の賜物といつてよからう。

原敬が内務大臣となつて、山県有朋が形成した閣族を根こそぎに退治したといわれるが、土木局長に対しては切りこむことができなかった。大正二年に一万人以上の行政整理が行なわれたときも、土木出張所長として小柴保人、近藤仙太郎が予想より早く退官し、市瀬恭次郎が所長に昇格し、名古屋土木出張所長が廃止され、勅任技師一名減といふ形で収まつた。

できた喜びを抑えて令旨をかみしめたことであろう。業を起すに易く、成るに難しとは、至言であつた。大阪市に於て久しく待ち望んだ起工ではあつたが、工事は日露戦争に阻まれて予定どおり進行せず、工期の伸びるたびに工費も追加せねばならなかつた。土木局長を去つた石黒五十二にも古市公威にも、日露の戦雲は重くのしかかつていた。石黒はかつて第六区土木監督署（久留米）の巡視長、署長として筑後川の改修に当たつたが、明治十九年六月から二十三年一月まで海軍技師を兼任して呉、佐世保鎮守府の創設に参加したことがある。海軍技師となつた石黒は臨時海軍部建築部工務監督を命ぜられ、三十九年一月まで非常時勤務に服さねばならなかつた。旅順港の閉塞作戦にも参画したといわれている。大隈重信の内閣が短命で崩壊したため、古市は閑日月を長く愉しむことができなかった。三十一年一月八日に発足し

た第二次山県内閣は山県の閥族の勢揃といつてもよいもので、古市は山県から強く望まれて、通信次官に就任することになった。古市は鉄道国有化、京釜鉄道の速成という難題を根気よく解決しようとしたが、政党内閣を排除して藩閥支配の持統をはかる山県有朋が憲政党とのかけひきで苦しみ、はかばかしく運ばなかつた。しかし挫けずに他日に備えることを怠らなかつた。鉄道會議、鉄道国有調査會、広軌鉄道改築準備委員會での活躍も山県内閣では実を結ばなかつたが、川上操六を会長、渡辺洪基、松本莊一郎を副会長として発足した帝國鉄道協會に、古市は最初から評議員として参加し積極的に活動した（やがて川上、渡辺、松本が次々と病没すると副会長に選任され、心ならずも隠然たる長老になつていった）。

第二次山県内閣に代わつて、政友会を基盤とする第四次伊藤内閣が成立した。この内閣の通信大臣に政友会員の星亨がなつたが、東京市議會の汚職事件で星が糾弾されて辞職し、代わつて原敬が就任した。首相の指導、裁定に、政友会所属の閣僚が承服しなくなり、三四年五月五日に閣内不統一で伊藤内閣は崩壊した。つづいて登場した第一次桂内閣は政友会に基盤をもたず、小山県内閣と呼ばれたように山県有朋の閥族で固められていた。桂は政友会とのかけひきで苦しむが、日露開戦による政争中止に救われ、短命内閣とはならなかつた。桂内閣の通信大臣には旧知の芳川頭正がなつており、京釜鉄道の建設が急がれるようになるや、にわか

古市は三六年三月三十一日に鉄道作業局長官に任命された。すでに三四年六月から国策会社として京釜鉄道株式会社が動いていたが、一般の民間会社のみでは作業が進まぬことが判り、政府が思いきつて乗りだし総裁、理事、幹事など幹部役員を官選とすることになった。一月二二日に古市は鉄道作業局長官を二年間休職として、京釜鉄道株式会社総裁に就任した。三六年七月から三七年二月まで内務大臣を兼任した児玉源太郎（陸軍大将）は、進んで古市と協議し声援を惜しまなかつた。京釜鉄道を三八年末までに完成せよ、それではまにあわない、三七年末までに完成せよと切迫するにつれ、古市はいよいよ落ちついて急務をさばいていった。優秀な人材を選んで現地に送りこんだだけでなく、ついに自ら赴いて陣頭指揮し、予定よりも早く全線開通にこぎつけた。日露戦争が終つたあとも戦後処理のために朝鮮にとどまつた。三八年一月二二日に休職期間が終つたが、三九年六月三〇日から四〇年六月一七日まで統監府鉄道管理局局長官として働き、統監の伊藤博文から厚い信頼をうけた。朝鮮の幹線鉄道網は古市によって固められたといつても過言でなく、児玉源太郎が満鉄総裁になれど古市に迫つたのも理由のないことではなかつた。古市は固辞して後藤新平を推薦したが、後藤が承諾するかしないうちに児玉は急死した。古市が児玉の死後も長く鉄道問題に深くかかわつたのは、児玉から受けた知遇が忘れられず、児玉が日露戦争に精魂を傾け

(9) Noble, J. R. (ed.) *Recollections of Virginia Woolf by her Contemporaries*, Ailix Strachey の訳, Peter Owen, London, 1972, pp. 116~117.

この27人の Contemporaries のうち Clive Bell と Vita Sackville-West は故人。また B. C. 放送でウルフの特集を比較的最近行った時、出演したのは Elizabeth Bowen, Janet Vaughan, David Cecil, George Rylands, Raymond Mortimer である。“あなたはウルフを天才と思いませんか。”という質問に対して全員 yes と答えている。この人たちの発言も本書にみなおさめられている。

(10) Woolf, L., *Downhill all the Way*, The Hogarth Press, London, 1967, pp. 167~169.

(11) 廣田真・阿部輝夫・石川一郎：躁うつ病の個性化、宮本忠雄編：躁うつ病の精神病理、弘文堂、1977, p. 108~127.

(12) Woolf, V., *Moments of Being*, ed. by Schulkind, J., The University Press, Sussex, 1976.

(13) Bell, Q., *Virginia Woolf*, vol. 1, The Hogarth Press, London, 1972, p. 26; 泉沢訳, p. 40.

(14) *Ibid.*, p. 44; 泉沢訳, p. 68.

神谷美恵子・著訳書

V・ウルフ	ある作家の日記	二八〇〇円
M・フーコー	精神疾患と心理学	八五〇円
M・フーコー	精神医学の誕生	二六〇〇円
ジルボーグ	医学的心理学史	品切
神谷美恵子	精神医学の歴史	三〇〇〇円
神谷美恵子	【異常心理学講座7所収】 生きがいについて	九〇〇円

みすず書房

〔36ページからつづく〕

て寿命を縮めた不運を慰めたからである。

古市は内務省土木局に、機能的な行政組織を残して去った。いわゆる親分、自分の閥族をつくることを、意識的に避けとおした。古市の残した枠組をみたすように、沖野が育てた人材がそれぞれの部署に定着した。沖野が大正七年七月一〇日に内務技監を辞任するとき、健康が思わしくないことを理由にあげた。これまでのように現場を綿密に見て歩かずにすむよう、有能な技師を身邊に補強するから辞任を思いとどまれ、内務技監の席に坐っているだけでよい、とまで説得された。大正六年の淀川洪水の破壊のしかた、身体的には老いこんだが、黙々と処理すべき要件を次々に処理して、静かに退官したのであった。沖野の遺志をついだ人々が、土木局の至る所にいたから、沖野の退官によって沖野の時代が終わったということとは当たっていない。

前回(第二一九号、一九七八年六月)の訂正と補足

三〇頁の表：寺尾寿、中村精男、和田雄治は貢進生でないから\*をとる。なお塩田仁松は明治一四年以前に病没したらしく早世と注記する。

三〇頁の下欄：フライブルグはフライベルクの誤植。

三二頁の上欄：日下部弁二郎(彦根藩)の事項に続けて次のように附記する。

日下部弁二郎と同級で同時に土木局に入った小柴保人(佐倉藩)は、開成学校で独語を選び鉱山学を志望したが、独語鉱山学科がなくなり、やむなく英語に転じ土木工学科に進んだ。